Special Feature 特集 2

LIXILの災害支援について

株式会社LIXIL 渉外部事業渉外G 主査
永安 崇（ながやす たかし）

2001年トステム株式会社入社。（後に株式会社LIXILへ統合）製品設計や新規事業等様々な部署を経て2020年5月より現職。

はじめに

2024年は年明けから大変な災害に見舞われました。新年1日目にマグニチュード7.6、深さ16kmの地震が発生し、石川県輪島市、志賀町で震度7を観測したほか、北海道から九州地方にかけて震度6強～1を観測。「令和6年能登半島地震」と命名されたこの地震では、死者数412人（行方不明者3人）と大変多くの人命が失われました。また、住宅の被害も全壊6,425棟を含む136,590棟の住宅が被害にあっておられます。（消防庁 令和6年 災害情報一覧より R6.10.29時点）亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、そのご家族や被災された方々に、心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

LIXILでは、被災地の緊急人道支援として特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォームに1,000万円、労働組合からは日本赤十字社に100万円を寄付しました。また、従業員による被災地への募金活動を行ったほか、復旧支援として被災した住宅において自社製品（浴室・トイレ・キッチンなど）の無料点検を実施しています。

「災害大国」の日本は、世界的にも自然災害が多い国の一つです。能登半島地震以前にも、2011年3月11日の東日本大震災は東北3県をはじめ各地に甚大な被害をもたらしました。その後、2016年熊本地震や2018年の西日本豪雨、北海道地震など、毎年のように大規模な災害が発生し、たくさんの人が避難を余儀なくされました。LIXILは、人びとの安心で快適な暮らしを守る企業として、被災地への製品寄贈や国内外の被災地への寄付、人材派遣など、被災地の要望に応じた支援活動を実施しています。また、災害配慮トイレ「レジリエンストイレ」や可動式アメニティブース「withCUBE」など、災害時にも活用できる製品を通じて貢献していきます。

被災地への貢献活動

災害により被災した多くの場所で、家や仕事場、そして地域の人々が集まる集会所などが失われてしまいました。LIXILは、東日本大震災や熊本地震の被災者の方々が憩い、復興について語り合う拠点として各地で建設されている「みんなの家」や「みんなの遊び場」に、製品を寄贈し、人々が安心して快適に過ごせる空間づくりに貢献しています。

みんなの家移築 —仙台市宮城野区新浜

東日本大震災で被災した3県・17カ所に建設された「みんなの家」のうち、2017年4月に宮城県仙台市で開館した「新浜みんなの家」は、2011年10月に初めて竣工しその役割を終えた「みんなの家」を移築したものです。震災の記憶を後世に残していくシンボリックな施設として資材等の再利用を実現し、LIXILが提供した陶器の白い手洗器も引き続き活用されています。LIXILは、この機にタンクレストイレ「SATIS」を新たに提供しました。

新浜みんなの家 外観

みんなの家 —熊本 益城町テクノ仮設団地

2016年4月に発生した熊本地震の被災地では、熊本県とくまもとアートポリスが進めるプロジェクト「益城町テクノ仮設団地 本格型みんなの家」の建設に協力し、窓やトイレ、キッチンなどのLIXIL製品を提供しました。入居者の集会スペースと、福祉の充実に向けた地域支え合いセンターの機能とを備えたこの施設は、入居者との話し合いの上で設計・建設されています。

本格型みんなの家

みんなの遊び場プロジェクト —福島 南相馬市

「子どもや家族が笑顔になれる空間を提供したい」という思いから、LIXILは2016年に福島県の「南相馬みんなの遊び場」の建設に協力し、窓やドア、トイレ、手洗い、タイルなどのLIXIL製品を提供しました。

みんなの遊び場 外観

仮設住宅の窓やサッシのアルミ建材の再利用

東日本大震災においては、被災地の仮設住宅に製品を提供するなど住まいの面から復興を支援してきました。復興が進む中で、役目を終えた仮設住宅の窓などのアルミ建材は回収され、震災直後にその生産を担った茨城県の下妻工場で溶解・再生されています。

東北の仮設住宅 外観

回収された仮設住宅の窓などに使われていた
アルミ建材と再生されたアルミ素材

これら再生アルミの一部については、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会でも使用しました。東京2020大会の大きなコンセプトの1つである「復興オリンピック・パラリンピック」の実現として、再生されたアルミ素材を提供。東京2020大会を象徴する様々

なシーンで活用され、たくさんの想いを形にして残し未来へとつなぎました。東京2020パラリンピック聖火リレートーチの素材の一部も再生されたアルミ素材が使用されています。人々の生活を見守ってきた仮設住宅が、平和のシンボルに姿を変え、一歩ずつ復興に向けて進む被災地の姿を世界に伝えました。

Photo by Tokyo 2020

LIXILは東京2020パラリンピック聖火リレープレゼンティングパートナーです

製品を通じた貢献

被災地では被災された多くの方々が避難所での生活を余儀なくされ、その避難所では通常施設利用者数をはるかに超えた数の人々がトイレを使用します。しかし大きな災害時には水洗トイレは使えなくなってしまう可能性が高く、その結果、水の流せない既設トイレが積み重なった排泄物で汚れてしまいます。こうなってしまったトイレの清掃は断水状態では非常に難しくなります。

災害配慮トイレ「レジリエンストイレ」

断水時にも使用できる「レジリエンストイレ」を開発し、2019年から販売をスタートしました。平常時には5L、災害時には1Lの水で洗浄可能な状態に切り替えられるこのトイレを通じて、過去の災害時にたびたび問題となってきた避難所のトイレの課題を解決し、人々の健康被害や災害関連死を減らすことを目指しています。

避難所となる学校や体育館、防災拠点となる庁舎などを中心に設置を進めているほか、地域の防災教育でも活用していただいています。LIXILは和歌山県田辺市教育委員会と協働し、地域防災を担うジュニア・ボランティアの育成を目的に、田辺市大坊小学校でトイレの防災授業を実施しました。

またレジリエンストイレは、「ジャパン・レジリエンス・アワード2019」で最優秀レジリエンス賞（企業・産業部門）を受賞しました。

ジャパン・レジリエンス・アワード
2019

可動式アメニティブース「withCUBE」

いつでも必要な数を持ち運び、どこでも簡単に設置ができる可動式アメニティブース「withCUBE」を2020年から発売しました。最新のシャワートイレや洗面器などで構成されるユニット商品で、大規模な工事を必要とせずに設置・撤収ができます。この設置・撤去が容易という特長を生かし、医療・防災環境における衛生的な空間をづくりを目的として、熊本赤十字病院および株式会社GK設計と共同研究を開始しました。2020年7月に発生した九州豪雨災害の際には、熊本県人吉市の避難所に「withCUBE」を設置しました。

避難されている方々のプライベート空間として活用され、COVID-19などの感染症拡大防止のための隔離スペース、臨時の療養室など、災害現場での多様なニーズへの対応を目指した取り組みを進めています。

熊本県人吉市の避難所に設置された「withCUBE」

おわりに

LIXILでは、「世界中の誰もが願う、豊かで快適な住まいの実現」というPurpose（存在意義）の実現を目指して、急速に変化する世界において日々の暮らしと社会にインパクト（良い影響）を生み出す製品やサービスの開発に取り組んでいます。災害レジリエンスの観点でも、これまでの企業活動や製品開発の過程で積み上げてきた経験を活かしながら、被災時にも出来るだけ普段と変わらない生活をおくることができるような社会の実現に貢献していきたいと思います。